広島大学大学院教育学研究科紀要　第二部　第57号　2008　245－253

日本語学習者のコミュニケーション意欲と学習動機の関連

小　林　明　子

（2008年10月２日受理）

Relation between Willingness to Communicate in Japanese and Learning Motive

Akiko Kobayashi

Abstract: The purpose of this article is to find out how motives for learning Japanese were related to Willingness to Communicate in Japanese. The participants were 325 international students who were studying in universities and graduate schools in Japan. The data was collected by two kinds of questionnaires. In the analysis, the structures of international students' motives were examined by using the factor analysis. As a result, five factors were extracted: (1) Interest in studying Japanese; (2) Interest in modern Japanese culture; (3) Orientation of understanding Japan; (4) Incentive orientation; and (5) Instrumental orientation. In addition, the relations between learning Japanese motives and Willingness to Communicate in Japanese were examined by using the path analysis. The result showed that Interest in studying Japanese and Instrumental orientation were related to Willingness to Communicate in Japanese.

Key words: international student, learning motive, willingness to communicate
キーワード：留学生，日本語学習動機，日本語コミュニケーション意欲

１．はじめに

近年日本語教育において，学習者同士または日本語母語話者とのコミュニケーションを目的とした教室活動が数多く取り入れられている。日本語コミュニケーションにおける個人差や情意要因について理解することは，授業における教室雰囲気の醸成や授業内容・方法を考えるうえで重要である。しかし，これまでの研究では，第二言語コミュニケーションにおける心理的過程に集約した調査は未だ十分ではない（MacIntyre, 2007）。第二言語教育の分野において，第二言語運用場面における個人差に特化した研究として，第二言語コミュニケーション意欲（Willingness to Communicate，以下 WTC と略す）に関する研究がある。第二言語 WTC は，「第二言語を用いて，特定の状況で，特定の人（または人々）との会話に参加する意志」と定義され（MacIntyre et al., 1998），第二言語コミュニケーション頻度や，職場での対人関係に関連することが明らかになっている（MacIntyre & Charos, 1996；浜脇，2004；Yashima et al., 2004）。また，先行研究では主に英語学習者や英語圏の第二言語学習者を対象として，WTC に関わる情意要因が調査されているが（MacIntyre & Charos, 1996；Yashima, 2002；Yashima et al., 2004），これらの要因は学習者の個人的背景や目標言語を学ぶ社会的意義によっても異なることが指摘されている（Yashima, 2002；Yashima et al, 2004）。

以上により本稿では，小林他（2007）及び小林（2008）の調査結果を踏まえ，留学生の日本語学習動機の特徴を明らかにしたうえで，日本語 WTC に関わる情意要因の一つとして日本語学習動機を取り上げ，日本語学

本論文は，課程博士候補論文を構成する論文の一部として，以下の審査委員により審査を受けた。
審査委員：縫部義憲（主任指導教員），多和田眞一郎，深澤清治

習動機と日本語 WTC の関連について検討することを目的とする。なお，第二言語 WTC は，読み書きによるコミュニケーションにも関わるが（MacIntyre et al., 1998），考えるための時間的余裕があり情意要因との関連も異なることが予測されるため，本稿では口頭でのコミュニケーションのみを調査対象とする。

2．先行研究

2.1. 第二言語教育における動機づけ研究

1950年代から第二言語の動機づけ研究において中心となってきたのは，R. Gardner 及び，W. Lambert による社会心理学の観点からの研究である（Gardner & Lambert, 1972；Gardner, 1985）。彼らの研究では，特に「統合的動機（integrative motive）」という概念に着目し，第二言語成績に影響すると仮定した。統合的動機とは，目標言語話者・社会への肯定的態度，コースや教師という学習環境に対する態度，学習への取り組み・努力を内包する概念である。カナダの中高生や大学生を対象にした調査を通して，統合的動機を持つ学習者は，クラス内外の目標言語使用機会を積極的に利用することにより，高い第二言語成績を得ることが示されている（Gilksman et al., 1982；Gardner & MacIntyre, 1991）。しかし，その後の研究によって外国語環境においては道具的動機のほうが成績を予測する可能性があること（Dörnyei, 1990），統合的動機の概念を外国語環境にいる学習者にそのまま当てはめることは困難であることが指摘されている（Yashima, 2000）。そのため，各学習状況に応じて動機を操作的に定義し調査を行う必要性がある（Clément & Kruidenir, 1983）。

以上のような研究に加えて90年代に入ると，新たに教育心理学・学習心理学の理論を取り入れることで，動機づけ研究全体の理論の拡張が行われた（Dörnyei, 1994；Oxford & Shearin, 1994）。Crookes & Schmidt（1991）は，これまでの研究は主に目標言語社会や文化から影響を受ける学習目標についての研究がほとんどであったことを指摘し，今後は授業内で喚起される動機づけに焦点を当て，学習者の動機づけがどのように学習に関わったかという観点からの研究が必要であると述べている。このような中で取り入れられた理論の一つとして，「自己決定理論（Self-Determination Theory）」（Deci & Ryan, 1985）がある。この理論では，動機づけを大きく「無動機（amotivation）」，「外発的動機づけ（extrinsic motivation）」，「内発的動機づけ（intrinsic motivation）」という３つに分類している。無動機とは，特定の目的を持たない状態である。内発的動機づけとは，関心があるから，楽しいから勉強するという学習そのものが報酬である動機づけである。外発的動機づけとは，報酬や賞賛，叱責の回避などが目的となっている動機づけである。Ryan & Deci（2000）は，学習者の「自己決定性（自律性）」が高まるにつれ，無動機から外発的動機づけ，内発的動機づけへと動機づけが促進されるとしている。また，そのような動機づけの連続性を裏付ける調査結果として，先行研究（Ryan & Connel, 1989；速水，1993；Hayamizu, 1997）では，概念上隣接する動機づけほど相関が強く，離れているまたは対極にある概念間では相関が弱いか負の相関が見られることが明らかとなっている。Noels et al.（2000）は，このような内発的・外発的動機づけという枠組みを用いることによって，これまでの研究で示された多くの学習動機を体系的な枠組みで整理し，理解することができると述べている。

日本語教育分野においては，これまで主に海外の学習者を対象として日本語学習動機の特徴を明らかにする調査が行われてきた（縫部他，1995；成田，1998；端野，2000；郭・大北，2001；李，2003；磐村，2004）。その中で縫部他（1995）は，内発的・外発的動機づけという枠組みを用いて，日本語学習動機を考察している。探索的因子分析から抽出された６因子のうち，「日本理解」，「国際意識」，「学習への興味」という日本語・日本文化への興味に関する動機を内発的動機づけとして分類し，「統合的志向」，「誘発的志向」，「道具的志向」という学習を手段としている動機を外発的動機づけとして分類した。縫部他（1995）は，外発的動機づけから内発的動機づけへと移行することによって，学習者が自己の生活と日本語学習との関わりを認識しやすくなると指摘している。

以上の研究から，第二言語の学習動機について検討する際には，学習者を取り巻く環境を考慮したうえで調査を実施し，理論的に整理する必要があることが示唆された。特に海外の日本語学習者と比較して，日本国内の留学生を対象とした調査は少ないため，国内の大学で学ぶ日本語学習者の学習動機の構造を明らかにしたうえで，内発的・外発的動機づけという観点から結果を考察していく必要がある。

2.2. 第二言語 WTC に関する研究

以上のような動機づけ研究に加えて，近年，第二言語コミュニケーションに関わる情意要因を検討した研究も見られる。その一つとして第二言語 WTC に関する研究がある。MacIntyre et al.（1998）は，第二言語使用に関連する要因についての探索的モデルを示し，第二言語使用に直接影響する要因として第二言語

WTC を設定した。また，第二言語 WTC に影響する要因としては，第二言語能力だけではなく，グループ間の関係や異文化グループに対する態度，接触動機などが関わるとしている。Yashima（2002）及び Yashima et al.（2004）では，日本で英語を学ぶ大学生の場合「国際的志向性（international posture）」という概念が英語 WTC に影響することを示している。Yashima（2002）によれば，「国際的志向性」とは，目標言語話者と友好的な関係を築きたいという動機，国際的な仕事・活動・出来事への興味，外国人と関わりを持とうとする態度から構成される概念である。日本人大学生にとって，英語は国際社会を象徴するものであり，国際社会と関わりたいという英語学習の意義が明確になるほど，英語 WTC が高まる可能性が示されている。

一方，小林他（2007）では，国内の大学に在籍する留学生を対象に日本語 WTC に関わる情意要因について調査した。調査対象者は，中国語を母語とする中級日本語学習者21名であり，１人あたり15～20分間の半構造化面接を実施した。分析においては面接の録音データを文字化し，日本語 WTC に関連する情意要因についての言及を抽出した。抽出したデータの整理は KJ 法（川喜多, 1967）を参考に行った。分析結果から，調査対象者の WTC に関連する主な要因として，日本語学習動機があることが示唆された。特に，就職，日本語学習への興味という２つの学習動機に対する言及が半数を占めていた。このことから，現在の学習の楽しさや興味に加えて，将来の職業像が明確である学習者は，日本語 WTC が高い可能性が示唆された。しかし，対象者が限られており，探索的な調査であることから，さらに量的調査を行い結果の検証を行う必要がある。

以上の研究を踏まえ本稿では，日本語学習者の学習動機と WTC との関連を検討することとした。具体的には，Yashima（2002），Yashima et al.（2004）及び小林他（2007）の調査結果から，以下のような仮説に基づいて分析を行う。

(1) 日本語学習や日本語そのものへの興味を持っている場合，日本語 WTC が高い。
(2) 日本語を将来の就職や仕事に活かしたいという動機を持っている場合，日本語 WTC が高い。
(3) 日本人との友好的な関係や，日本社会における出来事などに興味を持っている場合，日本語 WTC が高い。

3．調査概要

3.1. 調査目的

調査の目的は，留学生の日本語学習動機の構成概念を明らかにしたうえで，どのような種類の日本語学習動機が日本語 WTC に影響を与えるのか検討することであった。

3.2. 調査対象者

国内の大学・大学院９校に在籍する留学生370名から調査の協力を得た。未記入が含まれた質問紙を除外した結果，325名（男性156名，女性169名）のデータが分析対象となった。対象者の母語は，中国語160名，韓国語63名，その他102名（インドネシア語，英語，モンゴル語等）であった。

3.3. 調査材料

２種類の質問紙を用いた。質問紙の言語は，日本語・中国語・韓国語・英語であった。各国語版の作成にあたっては，バックトランスレーションを行い翻訳の適確性を確かめた。

(1) 日本語学習動機質問紙（資料1参照）

小林（2008）において作成した32項目から成る質問紙を用いた。日本語教育分野における先行研究（倉八，1993；縫部他，1995；成田，1998；高岸，2000；郭・大北，2001；李，2003；磐村，2004）及び学習者の自由記述をもとに，国内の大学・大学院で学ぶ留学生を対象として作られたものであった。調査対象者は，各項目についてどの程度自らの日本語学習動機としてあてはまると思うか７件法で回答した。

(2) 日本語 WTC 質問紙（資料2参照）

McCroskey（1992）による12項目から成る質問紙を日本語学習者用に修正して用いた。調査対象者は，４つの場面（個人間，小集団，大きな集会，人前）と，３タイプの相手（知らない人，知人，友人）に対して，日本語で自発的にコミュニケーションをしようとするかどうか０％～100％で回答した。

3.4. 調査方法

調査期間は2007年４月～12月であった。調査の実施に当たっては，各大学の日本語担当教師に郵送で調査を委託し，集団形式で質問紙に回答を求めた。

3.5. 分析方法

調査対象者が持つ日本語学習動機の構成概念を検討するため，Stepwise Variable Selection in Exploratory Factor Analysis（SEFA）[1)]を用いた探索的因子分析（最尤法・プロマックス回転）を行った。分析結果を解釈する際には，複数の適合度指標（カイ２乗値，CFI，RMSEA）[2)]を参考とした。

次に，探索的因子分析から得られた因子構造の妥当

性を検証するため，Amos 5を用いて検証的因子分析[3]を行った。

さらに要因間の説明関係を検討するため，パス解析[4]を行った。分析に際しては，仮説に基づいてモデルを設定したうえで，複数の適合度指標を参考として最適モデルを検討した。

4．結　果

4.1. 日本語学習動機の構造

SEFA による探索的因子分析の結果，解釈可能な5因子が得られ，モデルの適合度は，$\chi^2(50)=42.86$，CFI＝1.00，RMSEA＝0.00となった。このことから，すべての適合度指標が基準値を上回っており，モデルの適合度が良好であることが示された。SEFA による探索的因子分析の結果と因子間相関を表1に示す。

次に，探索的因子分析から得られた因子構造の妥当性を検証するために共分散構造分析による検証的因子分析を行った。5つの因子からそれぞれ該当する項目が影響を受け，全ての因子間に共分散を仮定したモデルで分析を行った結果，適合度指標は$\chi^2(94)=203.72$，CFI＝0.95，RMSEA＝0.06となり，想定したモデルは本調査対象者のデータを十分に表していることが示された。

SEFA と検証的因子分析から得られた5因子は以下のように命名した。第1因子は，日本語・日本語授業に対する興味に関する項目で構成されていたため「Ⅰ日本語学習への興味」と命名した。第2因子は，日本の雑誌，ドラマなどに対する興味で構成されていたため「Ⅱ現代日本文化への興味」と命名した。第3因子は，日本人の行動・生活や歴史などに関する興味で構成されていたため「Ⅲ日本理解志向」と命名した。第

表1　SEFA の結果

	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ
第1因子：日本語学習への興味					
Q2　日本語を勉強するのが楽しいから	0.99	-0.04	0.04	-0.05	0.04
Q1　日本語という言語に興味があるから	0.75	0.12	0.04	-0.11	0.07
Q3　日本語の授業が楽しいから	0.70	-0.06	-0.08	0.22	-0.04
第2因子：現代日本文化への興味					
Q8　日本の雑誌，小説に興味があるから	0.00	0.84	0.08	-0.05	-0.10
Q7　日本のドラマ，映画に興味があるから	0.08	0.79	-0.07	0.05	0.01
Q9　日本のファッションに興味があるから	-0.09	0.66	-0.02	0.10	0.13
第3因子：日本理解志向					
Q18　日本人の行動パターンに興味があるから	-0.05	-0.04	0.87	0.03	0.06
Q16　日本人の生活スタイルや習慣に興味があるから	-0.01	0.06	0.81	0.02	0.04
Q5　日本の歴史に興味があるから	0.22	-0.05	0.46	0.20	-0.19
第4因子：誘発的志向					
Q19　母国で日本語が人気だから	-0.04	0.00	-0.03	0.80	0.00
Q32　教養のある人と思われたいから	-0.03	-0.01	0.10	0.57	0.16
Q14　日本人に手紙，メールを書きたいから	0.14	0.11	0.17	0.51	-0.10
Q21　日本でアルバイトをするのに役立つから	0.07	0.07	0.03	0.33	0.10
第5因子：道具的志向					
Q29　母国の日本企業に就職したいから	0.06	-0.02	-0.04	0.07	0.69
Q30　日本で就職したいから	0.07	0.08	0.00	-0.09	0.68
Q31　自分の会社を作って日本と貿易したいから	-0.07	-0.05	0.06	0.11	0.60

	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ
Ⅰ日本語学習への興味	1.00				
Ⅱ現代日本文化への興味	0.36	1.00			
Ⅲ日本理解志向	0.45	0.35	1.00		
Ⅳ誘発的志向	0.32	0.33	0.57	1.00	
Ⅴ道具的志向	0.13	0.33	0.11	0.21	1.00

４因子は，母国での日本語人気や教養のためという周囲の影響に関する項目から構成されていたため「Ⅳ誘発的志向」と命名した。第５因子は，日系企業への就職や起業のためという項目で構成されていたため「Ⅴ道具的志向」と命名した。

因子間相関から，「日本語学習への興味」と「日本理解志向」の間に中程度の正の相関が見られた。また，「日本理解志向」と「誘発的志向」の間にも中程度の正の相関が見られた。一方で「道具的志向」は，他の動機との相関が比較的低く，特に「日本語学習への興味」，「日本理解志向」との相関が低かった。

以上の結果から，本調査対象者が持つ日本語学習動機の下位概念として５つの因子が抽出された。次に日本語 WTC との関連を検討するため，仮説に基づいて，抽出された５因子の中から対応するものを選択した。まず，日本語学習・日本語への興味という学習動機に対応するものとして，「日本語学習への興味」，日本語を用いて働きたい，就職に活かしたいという動機に対応するものとして「道具的志向」を選択した。また，日本人との友好的な関係構築，日本人・日本社会への興味から構成される動機として「日本理解志向」を選択した。以上の３因子と日本語 WTC との関連を検討することとした。

4.2. 日本語学習動機と日本語 WTC との関連

上記で選択した３つの日本語学習動機が日本語 WTC に影響することを仮定して，仮説モデルを構築しパス解析を行った[5)]。その結果，適合度指標は，$\chi^2(38) = 75.91$，CFI = 0.98，RMSEA = 0.06となった。このことからモデルの適合度が良好であることが示された。最終的なモデルを図１に示す。図１における実線は，有意な相関があったことを示す。破線は，有意な相関がなかったことを示している。

結果として，「日本語学習への興味」と「道具的志向」が日本語 WTC に対して低い値ではあるが有意な正のパスを示していた。このことから，日本語学習自体への興味や授業の楽しさが学習動機となっている学習者ほど，日本語 WTC が高い傾向が見られた。また就職や起業のためという日本語学習動機を持つほど，日本語 WTC が高い可能性があることが示唆された。一方で，「日本理解志向」から日本語 WTC へのパス係数は有意ではなかった。したがって，日本人の行動や習慣，歴史への興味は，日本語 WTC と関連しない可能性が示された。

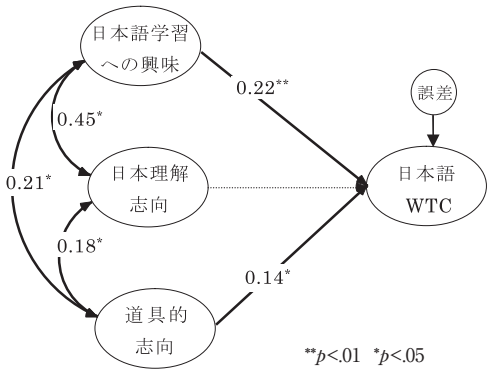

図１　パス解析結果

5．考　察

調査の結果，日本の大学・大学院で学ぶ留学生の日本語学習動機は，(1) 日本語という言語・授業に対する興味，(2) 雑誌，ドラマ，ファッションなど日本の現代文化に対する興味，(3) 日本人の行動・生活や歴史などに関する興味，(4) 母国での日本語人気や教養のためなど周囲の影響，(5) 日系企業への就職や貿易会社の起業のため，という５つの因子から構成されることが示された。以上のような５つの学習動機に関して，内発的・外発的動機づけの観点から分類してみる。「自己決定理論」(Deci & Ryan, 1985) の考え方に基づけば，学習そのものから得られる知的好奇心や刺激，達成感は内発的動機づけとして分類される。一方，それ以外は，全て外発的動機づけとされ，「自己決定性（自律性）」の程度に基づいて，段階的に分類される。このような観点から本調査結果を分類すると，「日本語学習への興味」は，内発的動機づけに分類される。一方で何らかの目的を達成するための手段として日本語を学ぶ「現代日本文化への興味」，「日本理解志向」，「道具的志向」，「誘発的志向」は，外発的動機づけとして分類されるであろう。

また因子間相関から，「日本語学習への興味」と「日本理解志向」の間に中程度の正の相関が見られた。このことから，「日本理解志向」は，内発的動機づけに近く，より自己決定性の高い外発的動機づけである可能性がある。また，「日本理解志向」と「誘発的志向」の間にも中程度の正の相関が見られたため，これらの学習動機も隣接した概念である可能性がある。一方で，「日本語学習への興味」，「日本理解志向」という２つの学習動機と，「道具的志向」の間の相関が低かったことから，「道具的志向」は，内発的動機づけから遠く，より自己決定性の低い外発的動機づけであることが示唆された。

さらに本稿では，上記の５つの日本語学習動機のうち３つの日本語学習動機が WTC に関わると仮定し，要因間の説明関係について検討した。結果として，日

本語学習や授業に対する興味という内発的動機づけに加えて，就職・起業のためという外発的動機づけが日本語 WTC を促進する可能性が示された。この結果は，小林他（2007）による探索的調査の結果とも一致している。道具的志向と日本語 WTC との関連については，調査対象者のほとんどがアジア圏出身者であり，特に隣国の中国・韓国からの留学生が多数を占めることから，将来仕事において日本語コミュニケーション能力が必要であるという認識が強い可能性がある。一方で，「日本理解志向」は日本語 WTC と関連が見られなかった。この結果は，英語学習者を対象とした先行研究（Yashima, 2002；Yashima et al., 2004）の調査結果と異なっている。因子間相関の結果から，「日本理解志向」と「誘発的志向」は，隣接した概念であることが示唆された。このことから日本人や日本の歴史に対する興味を持っている学習者は，同時に母国での日本語人気など周囲の影響が学習動機となっている可能性がある。英語が国際的な言語であるのに対して，日本語は使用される範囲・使用目的が限定的である。このような中で，日本に対する漠然とした興味のみでは，日本語コミュニケーションに対する積極的姿勢が促進されるには至らない可能性がある。

以上により，コミュニケーションを中心とした授業を実施するうえで，楽しさや興味という内発的動機づけを喚起するとともに，授業の目的や意義について，学習者が持つ自己の将来像と関連づけて十分に説明する必要があることが改めて示された。しかし先行研究からは，学習者は必ずしも教師の意図したとおりに授業目的を認識していない場合や，明確な学習目的を持っていない場合があることが指摘されている（Dörnyei, 2001）。村野井（2006）は，第二言語学習の目的・目標を把握させるための活動として，(1) 映像などを通して，第二言語を使って社会で活躍している人たちの姿を見せること，(2) そのようなコミュニティに学習者自身が一度入ってみること，という方法を提案している。本調査対象者の場合，大学や日本社会で活動している留学生の話を聞く機会を設けたり，留学生に対するインターンシップ等の機会を利用したりすることによって，日本語コミュニケーション能力を身につけることの意義を明確化させることが必要であろう。

今後は，学習者の日本語レベルや滞日歴などによって，日本語学習動機と日本語 WTC の関連がどのように異なるのか検討する必要がある。また，学習者に対するインタビューや自由記述などの調査結果から，対象者の日本語 WTC や学習動機がどのような学習経験を通して形成されたのか検討したい。

【注】

1）従来の探索的因子分析では，主に因子負荷量の大きさや経験則によって質問項目を選択していたが，SEFA においては複数の適合度指標を参照することで，項目の増減による因子モデルの適合度を確認することが可能となる（Kano & Harada, 2000）。

2）適合度指標とは，想定したモデルのデータへの当てはまりのよさを表す指標である（狩野・三浦，2002）。本研究ではカイ２乗値，CFI（comparative fit index），RMSEA（root mean square error of approximation）という適合度指標を用いた。山本・小野寺（1992）によれば，カイ２乗値とは「モデルが正しい」という仮説を検定するものであり，値が有意でない場合，モデルがデータに適合するとみなす。CFI は値が1.00に近いほど説得力があるとされるもので，モデルを採択するには0.90以上であることが一つの目安とされている。また RMSEA は，値が０に近いほど良いと考えられており，0.05以下であれば適合度が高く0.08以下ならそのモデルは受容されるとされている。

3）検証的因子分析とは，先行研究や他の知見に基づいて，因子と観測変数の間の関係を想定し，その仮説がデータと矛盾しないかを調べるものである。探索的因子分析の結果について検証的因子分析を用いて検証することにより，より適切な結論に至ることが可能となる（山本・小野寺，1999）。

4）パス解析とは，変数間の因果関係を変数間の相関係数をもとに調べる分析方法である（山本・小野寺，1999）。

5）日本語 WTC に関しては，先行研究（Yashima et al., 2004）の分析方法を参考に，12項目を偶数項目と奇数項目の２つにわけたうえで，それぞれの尺度値を算出し，観測変数とした。

【引用文献】

石井秀幸（1993）「日本語学習者の学習意欲を構成する因子の分析」『平成７年日本語教育学会春季大会予稿集』，1-6.

磐村文乃（2004）「韓国人女子大学生の日本語学習動機と対日観」『2004年日本語教育国際研究大会予稿集発表１』，179-184.

小林明子（2008）「日本語学習者の学習動機の構造－大学・大学院で学ぶ留学生を対象に－」『日本語教育学を起点とする総合人間科学の創出　広島大学大学院教育学研究科日本語教育学講座推進研究　平成19

年度報告書』, 5-15.

小林明子・八杉和子・麦田弘子（2007）「日本語学習者の Willingness to Communicate に関連する要因は何かーインタビューによる探索的調査ー」『教育学研究紀要（CD-ROM 版）』**52**, 533-543.

郭俊海・大北葉子（2001）「シンガポール華人大学生の日本語学習の動機づけについて」『日本語教育』**110**, 130-139.

狩野裕・三浦麻子（2002）『AMOS, EQS, CALS によるグラフィカル多変量解析』現代数学社.

川喜多二郎（1967）『発想法』中央新書.

倉八順子（1992）「日本語学習者の動機に関する調査ー動機と文化的背景の関連ー」『日本語教育』**77**, 129-41.

高岸雅子（2000）「留学経験が日本語学習動機におよぼす影響ー米国人短期留学生の場合ー」『日本語教育』**105**, 101-110.

成田高宏（1998）「日本語学習動機と成績との関係ータイの大学生の場合ー」『世界の日本語教育』 **8**, 1-11.

縫部義憲・狩野不二夫・伊藤克浩（1995）「大学生の日本語学習動機に関する国際調査ーニュージーランドの場合ー」『日本語教育』**86**, 162-172.

端野千絵（2000）「日本語学習者の動機づけが学習到達度に与える影響ーネパールにおける学習者の観察からー」『平成12年度日本語教育学会春季大会予稿集』, 69-74.

浜脇一莱（2004）『日本語教育における Willingness to Communicate と対人感情に関する基礎的研究ー外国語指導助手を対象としてー』広島大学大学院修士論文（未公刊）.

速水敏彦（1993）「外発的動機づけと内発的動機づけの間ーリンク信条の検討ー」『名古屋大学教育学部紀要』**40**, 77-88.

村野井仁（2006）『第二言語習得研究から見た効果的な英語学習法・指導法』大修館書店.

山本嘉一郎・小野寺孝義編著（1999）『Amos による共分散構造分析と解析事例』ナカニシヤ出版.

李受香（2003）「第２言語及び外国語としての日本語学習における動機づけの比較：韓国人日本語学習者を対象として」『世界の日本語教育』**13**, 75-92.

Clément, R., & Kruidenier, B. G. (1983). Orientations in second language acquisition: The effects of ethnicity, milieu, and target language on their emergence. *Language Learning*, **33**, 273-291.

Crookes, G., & Schmidt, R. W. (1991). Motivation: Reopening the research agenda. *Language Learning*, **41**, 469-512.

Deci, E. L., & Ryan, R. M. (1985). *Intrinsic Motivation and Self-determination in Human Behavior*. New York: Plenum Press.

Dörnyei, Z. (1990). Conceptualizing motivation in foreign language learning. *Language Learning*, **40**, 45-78.

Dörnyei, Z. (1994). Motivation and motivating in the foreign language classroom. *The Modern Language Journal*, **78**, 515-523.

Dörnyei, Z. (2001). *Motivational Strategies in the Language Classroom*. Cambridge University Press.

Gardner, R. C. (1985). *Social Psychology and Second Language Learning: The Role of Motivation*. London: Edward Arnold.

Gardner, R. C., & Lambert, W. E. (1972). *Attitudes and Motivation in Second Language Learning*. Rowley, mass: Newbury House.

Gardner, R. C., & MacIntyre, P. D. (1991). An instrumental motivation in language study who says it isn't effective. *Studies in Second Language Acquisition*, **13**, 53-72.

Gilksman, L., Gardner, R. C., & Smythe, P. C. (1982). The role of the integrative motive on students' perception in the French classroom. *Canadian Modern Language Review*, **38**, 625-647.

Hayamizu, T. (1997). Between intrinsic and extrinsic motivation: Examination of reasons for academic study based on the theory of internalization. *Japanese Psychology Research*, **39**, 98-108.

Kano, Y., & Harada, A. (2000). Stepwise variable selection in factor analysis. *Psychometrika*, **65**(1), 7-22.

McCroskey, J. C. (1992). Reliability and validity of the willingness to communicate scale. *Communication Quarterly*, **40**(1), 16-25.

MacIntyre, P. D. (2007). Willingness to communicate in the second language: Understanding the decision to speak as a volitional process. *The Modern Language Journal*, **91**, 564-576.

MacIntyre, P. D., & Charos, C. (1996). Personality, attitudes, and affect as predictors of second language communications. *Journal of Language and Social psychology*, **5**, 3-26.

MacIntyre, P. D., Clément, R., Dörnyei, Z., & Noels, K. A. (1998). Conceptualizing willingness to communicate in a L2: A situational model of L2 confidence

and affiliation. *Modern Language Journal*, **82**, 545–562.

Noels, K. A., Pelletier, L. G., Clément, R., & Vallerand, R. J. (2000). Why are you learning a second language? Motivational orientations and self-determination theory. *Language Learning*, **50**, 57–85.

Oxford, R. L., & Shearin, J. (1994). Language learning motivation: Expanding the theoretical framework. *The Modern Language Journal*, **78**, 12–28.

Ryan, R. M., & Connel, J. P. (1989). Perceived locus of causality and internalization. *Journal of Personality and Social Psychology*, **57**, 749–761.

Ryan, R. M., & Deci, E. L. (2000). Self-determination theory and the facilitation of intrinsic motivation, social development, and well-being. *American Psychologist*, **55**, 68–78.

Yashima, T. (2002). Willingness to communicate in a second language: The Japanese EFL context. *The Modern Language Journal*, 86, 55–66.

Yashima, T., Zenuk-Nishide, L., & Shimizu, K. (2004). The Influence of attitudes and affect on willingness to communicate and second language communication. *Language Learning*, **54**, 119–152.

【資料１】

日本語学習動機質問紙（平均値，標準偏差）

Q １日本語という言語に興味があるから（5.50，1.51）
Q ２日本語を勉強するのが楽しいから（5.14，1.53）
Q ３日本語の授業が楽しいから（4.90，1.57）
Q ４日本の伝統文化に興味があるから（4.91，1.74）
Q ５日本の歴史に興味があるから（4.20，1.91）
Q ６日本の漫画に興味があるから（4.18，2.03）
Q ７日本のドラマ，映画に興味があるから（4.67，1.90）
Q ８日本の雑誌，小説に興味があるから（3.93，1.83）
Q ９日本のファッションに興味があるから（4.23，2.05）
Q10日本の歌に興味があるから（4.71，1.86）
Q11日本のインターネットサイトに興味があるから（3.49，1.87）
Q12日本の有名人に興味があるから（3.58，1.90）
Q13日本のラジオ番組に興味があるから（3.20，1.78）
Q14日本人に手紙，メールを書きたいから（4.01，2.09）
Q15日本は隣国だから（3.67，2.15）
Q16日本人の生活スタイルや習慣に興味があるから（4.66，1.88）
Q17日本人の思考方法や価値観に興味があるから（4.70，1.92）
Q18日本人の行動パターンに興味があるから（4.60，1.84）
Q19母国で日本語が人気だから（4.04，2.06）
Q20日本での旅行に役立つから（4.94，1.97）
Q21日本でアルバイトをするのに役立つから（4.57，2.01）
Q22近所の人と仲良くなりたいから（4.71，1.91）
Q23将来日本に住みたいから（3.97，1.99）
Q24卒業のために日本語の単位が必要だから（3.84，2.23）
Q25日本語の授業で良い成績を取りたいから（4.97，2.04）
Q26専門の授業を理解したいから（5.48，1.89）
Q27日本語で論文やレポートを書きたいから（4.94，2.19）
Q28日本語の論文やレポートを読みたいから（5.20，1.96）
Q29母国の日本企業に就職したいから（4.78，2.00）
Q30日本で就職したいから（4.53，2.04）
Q31自分の会社を作って日本と貿易したいから（4.48，2.17）
Q32教養のある人と思われたいから（4.26，2.24）

【資料２】

日本語 WTC 質問紙（平均値，標準偏差）

Q １知らない人の一団（30人くらい）にスピーチ（プレゼンテーション）をする（33.22，30.60）
Q ２列に並んでいる間，知り合いと会話する（57.31，33.68）
Q ３友人同士の，大きな集まり（10人くらいの会議）で発言する（56.05，31.08）
Q ４知らない人同士の，小グループ（５人くらい）で会話をする（45.30，32.07）
Q ５列に並んでいる間，友人と会話する（74.52，28.88）
Q ６知り合い同士の，大きな集まり（10人くらいの会議）で発言する（49.17，32.61）
Q ７列に並んでいる間，知らない人と会話する（24.85，28.80）
Q ８友人の一団（30人くらい）に，スピーチ（プレゼンテーション）をする（47.26，32.74）
Q ９知り合い同士の，小グループ（５人くらい）で会話をする（61.85，32.74）
Q10知らない人同士の，大きな集まり（10人くらいの会議）で発言する（29.98，29.40）

Q11友人同士の，小グループ（５人くらい）で会話をする　（66.09，31.46）

Q12知り合いの一団（30人くらい）にスピーチ（プレゼンテーション）をする　（44.66，33.33）